

遼東半島先端近くに位置する港湾都市大連。大連図書館はその西部、南山麓の丘陵に位置している。そこにいわゆる旧満鉄資料の多くが未公開まま眠っていることは、すでに何度か報告されてきた。市街地郊外に新築された壮大な図書館にこれらの資料が移送されたのは一九九〇年代初頭と伝えられ、この膨大な資料の山が、書庫の六階から十階までを占めている。だがその全貌を瞥見できた研究者の数は、なお限られている。このほど張本義館長のご配慮で、予備的な調査に従事できた。以下簡潔にご報告申し上げたい。

旧満鉄収集と目される図書は、ほぼ40万冊。そのうち日文が17万冊、欧文が3万冊、中文が20万冊と概算される。書庫10階は中国書籍や行政報告が大半を占め、ついで9階には新聞、地形図および列本を含む明治白話小説、8階には戦前に出版された主要な日本書籍が、分野別に整然と分類された傍らに、新聞社などが作成した写真カード類が雑然と積み重ねられている。実はここまでで2時間近くを費やし、館長との面会時間となったため、以下は突見していないが、7階には定期刊行物が目下整理中、6階には通称ユダヤ文庫、遼東文庫を含む欧文書籍が配列され、これも目下専門の司書1名が作業中とのこと。

このうち、9階の白話小説類は大谷光瑞旧蔵書。他に類例をみない貴重な和刻・韓刻刊本を多数含み、そ

旧満鉄図書館資料瞥見
中日近代史の見直しにむけて

2579号
2002年
4月27日

国際日本文化研究センター研究員、総合研究大学院大学助教 稲賀繁美

の復刻が図書館から刊行中。また原本は各々の寸法に合った柄の小箱に収められていて、湿度も低く冬季の寒冷な当地での保存には、さしあたり問題はない。また羅振玉の著作も、旧蔵書を含め体系的に保存されているため、台湾版よりも完備した全集を編む計画があると、館長は力説した。また既に漢方医学書籍目録も編められている。

だが資料全体を眺めた時に、保存対策が最も急がれるのは定期刊行物、とりわけ旧関東省および旧「偽満洲国」時代に各地で発刊された新聞だろう。張館長就任以来、日文・中文新聞はとりえず緑色の箱（厚紙製）に格納して、紙名と期間を記したラベルを貼って書架に配列された*。だがこれらも、全頁を一度捲れば、もう二度と閲覧不可能となる程度に紙質が悪化している。保存状態の悪い新聞によっては、周囲はすでに劣化や破損のため判読不可能となっている。さらに欧字新聞は保管場所がないため、依然として書庫の隅に高さ1メートル程、幅4メートル長さ10メートル程にわたって、床に直接山積みされたまま。当地で発行されたサプリメントなどが挿入されているのか否かも確認不能。

これらを手遅れにならない内にマイクロ化する作業には、ざっと1億円の資金と10年程度の長期計画が必要だろう。館長からは、日本のさる財団の資金援助をようやく3年越しで本年度獲得したが、資金にくらべ

て運用や書類手続きが繁雑に過ぎ、決定が遅過ぎる、などの不満が表明された。いずれにせよ、専属の司書3名では焼け石に水。日本、韓国の近代史研究者も含めた体系的な協力が不可欠だが、目下のところ日本側からの接触は一本化されておらず、調査依頼も単発かつ部分的で、つまみ食いに終わっている。図書館側としても、一般公開のためには、それに先立って新たな目録の編纂が必要となる。だが旧満鉄の配列を現在のものに改めてしまえば、もはや旧満鉄図書館資料としての意義は失われることにもなりかねない。

往年の満鉄図書館は、大連市内中央の中山広場ほど近くの魯迅街にある魯迅路分館（旧満鉄本社向かい）として現存するが、ここの書庫（7層）は戦前の分類を維持していて、巡回図書館の雰囲気をも今に伝えている。とりわけ請求番号Mは満洲関係資料。満鉄調査部秘密資料も、青表紙のカリ版刷りで「総記」に並んでいる。蒐集状態と分類方式そのものが歴史的史料としての意義を担うこれらの膨大な書籍。その調査・保存・整理には、中国側からの要請に即応できる日本側の体勢固めも急務だろう。

*なお『日本文化研究』大連外国語学院日本文化研究中心、長春出版社、第1号（2000）の巻末には、所蔵新聞紙名概略など、国文学、朝鮮学、近代史研究者による簡略な報告がある。